電

○

〔天文本倭名類聚抄二神靈〕雷公○中略　玉篇云、電音甸、和名伊奈比加利、一云伊奈豆末、雷之光也、陰陽激燿也、

〔箋注倭名類聚抄一神靈〕按、以奈比加利稲光也、以奈豆流比、稲交接也、以奈豆末、稲妻也、蓋謂初秋之際、陰陽激而發燿光、田家雜占云、夏秋之間、夜晴而見遠電、俗謂之熱閃、是也、稲穀以是時而實、故有是等之名、與電自別、雷電之電、宜訓伊加豆知乃比加利、見佛足石歌、後世混呼無別、○中略　玉篇三十卷、陳顧野王撰、所引文、今本無載、按、初學記、引五經通義云、電謂之雷光也、卽此義、

〔段注說文解字十一下雨〕電　霆易激燿也、孔沖遠引河圖云、陰陽相薄爲靁、陰激陽爲電、電是靁光、按、易震爲靁、離爲電、月令靁乃發聲、始電、詩十月之交、春秋隱九年、言震電、詩采芑常武雲漢言靁霆震靁一也、電霆一也、穀梁傳曰、電霆也、古義霆電不別、許意則統言之謂之靁、自其振物言之謂之震、自其餘聲言之謂之霆、自其光燿言之謂之電、分析較古爲愿心靁電者一而二者也、从雨从申靁自其回屈言、電自其引申言、申亦聲也、小徐本作雨申聲、堂練切、古音在十二部、讀如陳、

〔釋名一釋天〕電殄也、乍見則殄滅也、

〔類聚名義抄七雨〕電音甸、イナヒカリ、一云イナツルヒ、又云イナツマ、ヒカリ、ヒラメク、イナタマ、和テム、　霆定亭挺三音　霹靂　イナヒカリ

〔撮壤集上天像〕電　電母テンホ　飛火ヒグワ　閃電光センテンクワウ　イナツマ

〔藻鹽草一天象〕稲妻　よひの稲妻　かよふ稲妻いなづまかよふ　稲妻のかげ　照す稲妻　稲妻の光稲妻の光のまにもかはるこゝろなどよめり、はやくかはる心也、　稲妻のわたる、　この間もひかる稲妻　雲のはつれに殘る稲妻　稲妻ほのかにめぐる　秋の稲妻　もゝかゞり稲妻の事也と　ほのうへ照す稲妻　やどる稲妻　光みえさすよひの稲妻

〔東雅一天文〕電イナビカリ　イナとはイカの轉語にて、これも畏るべきの事なり、ヒカリは光なり、又イナヅルヒともいふ、ツルヒとは出火なり、又イナヅマともいふは、もとこれ農家炎旱の日に、雷雨を得て、稲の胎まむ事を、おもひ望むより出し語なりといふ、稲妻としるせり、

〔和漢三才圖會三〕電　和名伊奈比加利、一云伊奈豆末、雷之光也、陰陽激燿、其雷同氣、而爲分析者也、